

犬の空腸腫瘍

東京大学

〔動物〕 犬、ビーグル、雄、11歳9ヵ月。

〔臨床症状〕 健康診断で消化管腫瘍を指摘され、CT検査にて空腸の2箇所にも腫瘍を認めため切除（標本A・B）。術後4ヵ月で転移・再発の兆候は見られていない。

〔肉眼所見〕 腫瘍はいずれも嚢胞状であり、内腔に淡黄色透明粘稠な液体が貯留していた。また、一部で大網との癒着を認めた。腸間膜リンパ節に転移病変は見られなかった。

〔組織所見〕 標本Aでは正常な粘膜から連続して、上皮が内輪走筋層に陥入する像を認めた。陥入部とその周辺では絨毛構造が消失し、粘膜固有層に胃底腺と類似する組織が観察された。また、筋層内に円柱上皮で内張された複数の嚢胞を認め、嚢胞壁において壁細胞様の細胞が散見された。特殊染色および免疫染色の結果、陥入部と嚢胞壁の上皮はPAS染色、コンカナバリンAパラドックス染色に陽性、アルシアンブルー染色、Mucin (MUC) 5AC、Caudal-type homeobox (CDX) 2に陰性であり、頸部粘液腺や幽門腺と同様の染色性を示した。標本Bでは粘膜固有層に胃底腺類似の組織が観察され、筋層では標本Aと同様の嚢胞構造を多数認めた。また、筋層の一部で平滑筋の不規則な増生とともに、間質反応を欠く腺上皮の乳頭状増殖巣を認めた。増殖上皮は頸部粘液腺や幽門腺と同様の表現型を示し、Ki67陽性率は低く、 β -cateninやp53の核内集積は認められなかった。

〔診断〕 空腸の多発性異所性胃粘膜および腺腫

〔考察〕 異所性胃粘膜は胎生期に胃腺組織が迷入して生じる発生異常であり、ビーグル犬で発生が多いとされる。通常、異所性胃粘膜は既存の粘膜組織を置換するように認められるが、本症例は粘膜下への陥入や嚢胞形成が主体であり、比較的稀な病変と考えられた。ヒトでは異所性胃粘膜からの胃酸分泌により周囲組織に潰瘍が生じることがあるが、動物では稀とされ、本症例でも粘膜傷害は見られなかった。また、本症例では筋層内に腺上皮の増殖性病変が見られ、腺癌の浸潤病変との鑑別が重要であった。本症例では腫瘍組織の表現型が周囲の異所性胃粘膜と類似したことや、間質反応を欠く点、Ki67・ β -catenin・p53の染色結果を考慮し、当該病変を筋層内の異所性胃粘膜に生じた良性腫瘍（腺腫）と判断した。（文責：畝山 瑞穂・チェンバーズ ジェームズ）

〔参考文献〕 Iwata H, et al. Heterotopic Gastric Mucosa of the Small Intestine in Laboratory Beagle Dogs. Toxicol Pathol. 1990;18(3):373-379.